

第3話 (3頁) おかゆ

子守のねえさんが、おかゆを食べてた。
マーシャがねえさんにだっこした。
ねえさんマーシャにおかゆをあげた。
はえがマーシャのお手々に止まった。
マーシャは、はえにおかゆをあげた。
ねえさんもまんぷく。
マーシャもまんぷく。
はえもまんぷく。

「親切心から食べ物を分け合う、という話は、一つ前の『ワーリャとはちみつ』と似ているよ。でも、嫌われ者のハエにもおかゆをあげた、とあっては、えっと驚いた。」

「ハエはロシアでも害虫だろうに。田舎の映像を見たとき、ハエ捕りのガムテープが上から吊るされていた。」

「そもそも、ねえさんは自分だけでおかゆを食べていた。だから、最初は、全部食べ尽くそうと思っていたんじゃないか。」

「そこへマーシャが抱っこしてきたから、仕方なく、少しあげたと…。」

「いや、喜んで、じゃないか。そう考えないと、話に無理が出てくるよ。」

「しかも、日本では想像できないほど、ロシア人は弱者や動物を思いやる同情心が強い。」

「とにかく、マーシャがハエにもおかゆをあげた行為をどう解釈するか。それが、この話のキーポイントかな。」

「なんとも、哲学的な命題だ。」

「ねえさんも、マーシャも、ハエも、みんな『まんぷく』と締めくくり、よかった、よかった、で終わっている。この話で、トルストイはいったい、どんなメッセージを伝えようとしたのだろうか。」

「アーズブカって、話の中でいいとも悪いとも言わずに、読み手の子どもたちに懸命に考えさせようとしている。そういう特徴は、まだ3つの話を読んだだけでも、はっきりしてきたね。」